

画像リテラシーを育成する トレーニングパッケージの開発と授業試行

Development of the package for training and lesson trial which raise photograph literacy

岡部 昌樹
Masaki Okabe

〈要旨〉

画像リテラシーの構成要素を抽出し、体系的かつ汎用性の高いテキストを開発した。さらに、中核概念である「記録」「造形」「伝達」に関する基本能力を育成するためのトレーニングパッケージを開発し、授業試行を通してパッケージの有用性を検証した。その結果、小学校高学年段階でTT方式をとれば、3単位時間（1単位時間は45分）程度で（第1回「表情をアップで撮ろう」、第2回「面白い形を撮ろう」、第3回「伝えたいテーマを撮ろう」）、基本的な画像リテラシーの育成が可能であることが明らかになった。

〈キーワード〉

メディア教育、画像リテラシー、パッケージ開発、初等教育、授業実践

1 開発の意図

初等教育段階でメディアリテラシーを育成するには、メディアの記号次元とリテラシーの教養次元に焦点を当てた映像（画像）教育が基本である^[1]（図表1）。

図表1 メディアとリテラシーの次元

リテラシー次元 メディア次元		I 教養	II 機能	III 批判
A	記号	A-I 映像教育	A-II	A-III
B	装置	B-I	B-II 情報教育	B-III
C	システム	C-I	C-II	C-III メディア教育

1990年代以降、コンピュータを中核に据えて、情報を一元的に扱うメディア融合が可能になったことから、映像の「使い手」としての映像活用能力の育成が重視されるようになった^[2]。2000年以降は、映像活用能力を中核に据えた、小学校用の映像教育やメディアリテラシー育成のカリキュラムも開発されている。現在、学校現場では映像教育と情報教育とメディア教育が混在する状態となっている^[3]。

学校現場は、今日まで映像リソースに対して常に簡便性と恒常性を希求してきた。リソースの入手が不便で合った時代にあっては、映像教育の基本である「受け手」「使い手」

の能力育成は極めて困難であった。そのため、動画に関しては、「作り手」としての能力育成からスタートする実践事例も数多く見られた。動画編集はデジタル化が進んだ今日においても膨大な時間を必要とするため、かえって実践が一部の教員に偏り、一般化されない理由にもなっている。しかし、これらの課題も、デジタルコンテンツの普及とともに解消されつつある^[4]。

映像教育の基本は、静止画である。今日ではデジタルカメラが小学校現場に普及し、グループに一台の使用も可能になってきている。静止画による「記録」「造形」「伝達」に関する知的スキルを身につけた上で、動画制作に関するリテラシーを育成する方が効果的と思われる。

2 開発にあたっての留意点

2-1 国語科との整合性

小学校の学習指導要領には、映像理解の発達段階に関する記述は見られない。しかし、記号次元では同じである言語を扱う国語科においては、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の能力目標は、極めて体系的に整理されている（図表2）。映像の活用には言語がミックスされることが多いことから、画像リテラシー育成パッケージの開発においても整合性に留意することとした。

直接、映像や画像の特性を取りあげた唯一の国語科の複合教材として「アップとルーズで伝える」（光村図書、4年生）がある。学習課題として、“テレビの画面は、わたした

ちに何を伝えようとしているのでしょうか、目的に合わせた伝え方について考えましょう。”が設定されている。アップとルーズが、それぞれ伝えられることと伝えられないことを読みとらせることを意図している。さらに、「選んで伝える」という補助資料において、テレビにおいても“カメラでうつしたシーンの中から、送り手が伝えたい場面を選んで画面にうつします。”“文書で何かを伝える場合も同じです。”と解説し、3枚の写真(イラスト)で表現する意義を解説している。しかし、本教材の主眼はあくまでも映像の伝達特性の言及に留まっている。

図表2 小学校国語科における学年別・領域別具体目標

学 年	話すこと・聞くこと	書くこと	読むこと
一・二年	<ul style="list-style-type: none"> 相手に応じて、<u>事柄の順序</u>を考えながら話すことができる。 相手に応じて、<u>大事な</u>ことを落とさずに聞くことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 順序が分かるように書くことができる。 語や文の書き方に注意して書くことができる。 楽しんで表現できる。 	<ul style="list-style-type: none"> 順序や場面の様子に気づきながら読むことができる。 楽しんで読書しようとする。
三・四年	<ul style="list-style-type: none"> 相手や目的に応じて、調べたことを筋道をたてて話すことができる。 話の中心に気をつけて聞くことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 相手や目的に応じて調べたことが伝わるように段落相互の関係を工夫して書くことができる。 適切に表現しようとする。 	<ul style="list-style-type: none"> 目的に応じて、中心をとらえたり、<u>段落相互</u>の関係を考えよむことができる。 幅広く読書できる。
五・六年	<ul style="list-style-type: none"> 目的や意図に応じて、考えたことやつたえたいことを<u>適切</u>に話すことができる。 意図をつかみながら聞くことができる。 計画的に話と合うことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 目的や意図に応じて、考えたことを筋道を立てて書くことができる。 効果的に表現しようとする。 	<ul style="list-style-type: none"> 目的に応じて、<u>内容や要旨</u>を把握しながら読むことができる。 読書を通じて、考えを広げたり深めたりできる。

(平成10年度告示、___は筆者が追加)

2-2 映像教育との整合性

テレビ番組を主教材に据えた映像教育用パッケージにおいても、映像の処理過程では静止画像を多く用いている(図表3)^[5]。これまでの映像教育カリキュラムでも重視してきた、「作り手」の『構成力』『創作力』との整合性にも留意して再考することとした。

図表3 動画を主眼とする映像教育カリキュラムの骨子

領域 \ 能力	視 点	主 な 内 容
A-1 理解力	論 理 直 観	<ul style="list-style-type: none"> 映像構成の特色 モンタージュの特色 感じ方の相違
A-2 洞察力	推 論 視 点	<ul style="list-style-type: none"> シンボルの関係づけ 視点移動 見方、感じ方の変化
B-1 探索力	収 集 選 択	<ul style="list-style-type: none"> タイトルからの内容予測 必要なシーンの抽出 多様なメディアからの情報選択
B-2 発信力	モード 複 合	<ul style="list-style-type: none"> 適切な言語情報の付加 シンボルの組み合わせ表現 情報の映像化
C-1 構成力	技 法 立 案	<ul style="list-style-type: none"> 技法の組み合わせ 技法の効果的な活用 意外性のある構成
C-2 創作力	分 析 創 造	<ul style="list-style-type: none"> 情報モードの特性 情報の構造化 情報関連図の映像表現

3 パッケージ開発

3-1 写真集の分析

写真集(社団法人日本写真協会, 2006年度版)は、29頁からなり、以下の4つ章で構成されている。①写真を写してみよう。②こんな撮り方があるよ。③写真ってどうやってできるのかな。④こんな写真が撮られてきた(写真1-1・2)。

能力目標の抽出にあたっては、写真集①②のみを対象とした(③はカメラの構造特性、④は映像史を取り扱っていることから、初等教育レベルでは必ずしも必要な知識とはいえず、解説もかなり高度である)。各ページの写真・構成や見出し、活動支援情報を抽出して(写真1-1・2、図表4-1・2)、能力目標を取り出し、ワークブックとして再編することとした。

写真1-1 写真集(社団法人日本写真協会)①章



(許可を得て、2006年度版より一部抜粋)

写真1-2 写真集(社団法人日本写真協会)②章



(許可を得て、2006年度版より一部抜粋)

図表4-1 ①章の活動支援テキスト情報

章・頁	見出し	解説・活動支援情報
① 4-5	いろいろな表情をアップで撮ろう。	<ul style="list-style-type: none"> ・まじめな顔 お互いの顔 驚いた顔を撮ろう。 ・一歩近づくと上手になるコツ。 ・プランコにのっているみたいに、グリーンと近づいたり、サーと遠のいたり、そんな撮り方が良いんだよ。
① 6-7	お庭でも写そうね 家の中でも写そう	(テキスト情報なし) <ul style="list-style-type: none"> ・ペットたちも撮ってあげようね。 ・撮っているわたしは、逆さにみえるかな。
① 8-9	きれいな風景 めずらしいものは全部撮ろう。	<ul style="list-style-type: none"> ・ロングショットっていつ、アップの逆で大切な撮り方なんだよ。 ・どんどこだったか、みんなに話すように写真を撮ろう。 ・お話が生まれそうな写真を撮ろう。
①10-11	お友だちが撮った楽しい写真	(テキスト情報なし)

図表4-2 ②章の活動支援テキスト情報

章・頁	見出し	解説・活動支援情報
② 12-13	アッ!と思ったら、シャッターを押してみよう。気がつかなかったモノが写っていたり、後でみると楽しい。	<ul style="list-style-type: none"> ・いろいろ写してみよう。 ・撮る角度を変えてみよう。 ・正面から、横から、上から、下から、斜めからいろいろな方向から見ると少しずつ違って見えるね。
② 14-15	速くで写す、近くで写す。 広角レンズで写す。望遠レンズで写す。きれいに写そう。	<ul style="list-style-type: none"> ・遠くから見ると小さいけれど全体が見える。近くと大きく写すけど、周りが見えなくなるんだね。 ・2枚の写真は、写っている花の大きさは同じなのに、背景の塔の大きさや風景の入りかたが違うんだ、どうしてかな? ・ピントをどこにあわせようか、ボケているものや動くものもおもしろい。
② 16-17	登校から下校までを時間で追ってみよう。朝顔の芽生えから開花までの成長記録	<ul style="list-style-type: none"> ・こういうものを組写真とか、フォトストーリーっていうんだよ。 ・写真を集めると一枚写真の写真で伝わらない、いろいろなことを伝えることができるよ。
② 18-19	写真はこんなところにも使われている。	(各写真の見出し)

3-2 能力目標の抽出と領域設定

写真の特性とテキスト情報をもとに、小学校高学年児童に焦点を当てた能力目標を設定し、3つの分野に分類した。(下線は重要行動目標)。

A <記録>

- A-1 動いている人物を撮り、何を捉えたかったか説明できる。
- A-2 驚いている顔、笑っている顔、怒っている顔を見つけて撮ることができる。
- A-3 身のまわりにある被写体を「近くから」「遠くから」撮り、発見したことや感じ方の違いが指摘できる。
- A-4 もっと工夫すればよかったことが指摘できる。
- A-5 撮影した写真の中から、気に入った写真を選択し、選んだ理由を説明することができる。

B <造形>

- B-1 興味を持ったものを撮り、伝えたいことが伝わるか説明できる。
- B-2 角度を変えて(正面から、上から、斜めから、後ろから)撮影し、気づいたこと、感じ方の近いと言える。
- B-3 同じ被写体を「近くから」「遠くから」撮り、発見し

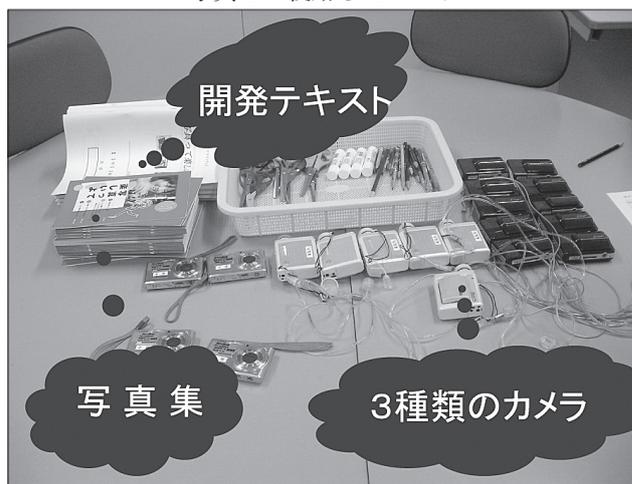
たことや感じ方の違いが指摘できる。

- B-4 広角で撮った場合と望遠で撮った場合の違いが指摘できる。
- B-5 手前にピントを合わせて撮った場合と後ろにピントを合わせて撮った場合の違いが指摘できる。
- B-6 接写して撮って写真から発見したと言える。
- B-7 はやく動いているものを撮った写真から発見したと言える。
- C <伝達>
- C-1 被写体を特定してスリーショット(アップ、近景、遠景)でテーマを主張することができる。
- C-2 テーマに即して、撮りたいものをスケッチできる。
- C-3 写真でストーリーが構成できる。
- C-4 4コマでフォトストーリーを制作することができる。
- C-5 めずらしいもの、美しいもの、変わったものを撮り、伝えたいことが主張できる。

4 授業試行

試行授業は、金沢市立米丸小学校サマータイム(4~6年生、21名参加)を活用し、TT方式で1コマ40分の授業を3回連続(第1回「表情をアップで撮ろう」、第2回「面白い形を撮ろう」、第3回「伝えたいテーマを撮ろう」)して実施した。デジタルカメラ、写真集、ワークブックは各25セット準備した(写真1)。

写真1 使用したキット



4-1 第一次テーマ「表情をアップで撮ろう」

A-2・A-5のねらいを達成するため、以下の活動を設定した。

ねらいを確認して、指定の枚数のみ友達の表情を撮影した。撮影した写真は全て切り離して、ワークブックに貼り、表情を言語表現(気持ちを表現)した(写真2-1)。その

際、選択した理由と選択しなかった理由もワークブックに記録させた(写真2-2)。

主な学習活動	時間
1. 友達のいろいろな表情を大写し(アップ)で撮ろう。	10
2. 印刷して、切り離す。	5
3. 3枚選んで、ワークブックに貼る。	5
4. 画像を見て、気持ちを表現する。	10
5. 選ばなかった画像もノートに貼る。	5
6. お互いに見せ合い、感想を述べる。	5

写真2-1 第一次の活動の様子



- ① 目標の確認とカメラの持ち方
- ② 顔の表情を捉える。
- ③ ワークブックの補足説明。
- ④ 撮影した写真を全て切り取る。

写真2-2 選択しなかった理由



最終選考から外れた写真に対しても、その理由を書かせることで、表情の読み取れる写真と第三者に伝わりにくい写真の特性を一層明らかにさせることができた。また、友

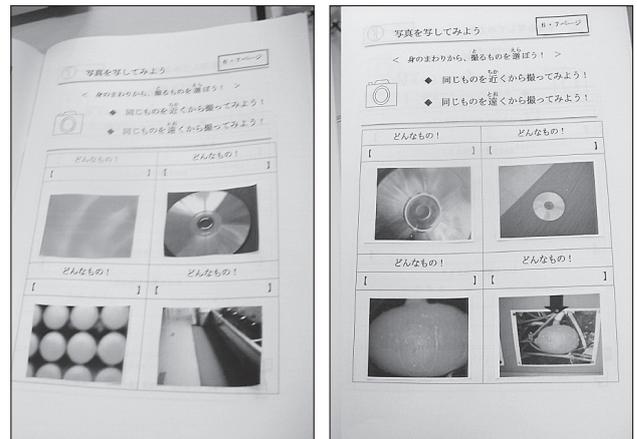
達と見せ合うことで選択した理由をより鮮明にすることができた。

4-2 第二次テーマ「面白い形を撮ろう」

B-3のねらいを達成するため、以下の活動を設定した。イメージのわからない児童に対しては、第三者の作品鑑賞が効果的であった(写真3)。

主な学習活動	時間
1. 身の回りからテーマを見つけ、撮るものを選ぶ。	10
2. 同じものをく近くから>・く遠くから>撮る。	10
3. 印刷して切り離し、2セットをワークブックに貼る。	10
4. 気づいたことをメモする。	5
5. お互いに見せ合い、感想を述べる。	5

写真3 第二次の児童の作品事例
作品事例 A 作品事例 B



4-3 第三次テーマ「伝えたいテーマを撮ろう」

C-1のねらいを達成するため、以下の活動を設定した。

主な学習活動	時間
1. 伝えたいこと(テーマ)を見つける。	10
2. <近づいて><少し離れて><遠くから>撮る。	10
3. 印刷して切り離し、二つのテーマを選択する。	5
4. テキストブックに<アップ><近景><遠景>に分けて貼る。	5
5. どんなことを伝えたいか、伝えなかったことをメモする。	5
6. お互いに見せ合い、感想を述べる。	5

伝えたいことを何故「近づいて」「少し離れて」「遠くから」

撮るかについての意味理解が不十分なため、距離感がつかめない児童も見られた。そこで、まとめとして伝えるために何故、三つのシーンが必要であるかについて、児童の作品事例をもとに補足説明を行った(写真4)。

写真4 児童作品事例と学習のまとめ



(金沢学院短期大学・吉田貞介教授による補足説明)

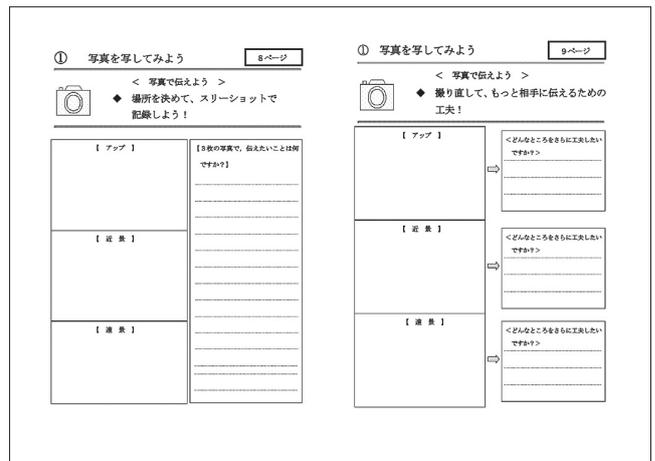
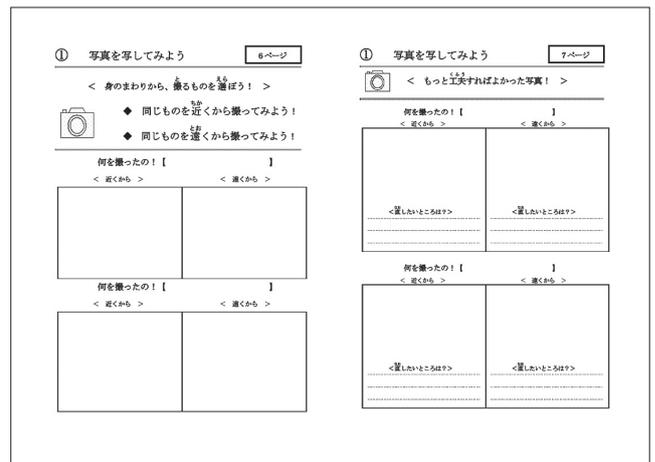
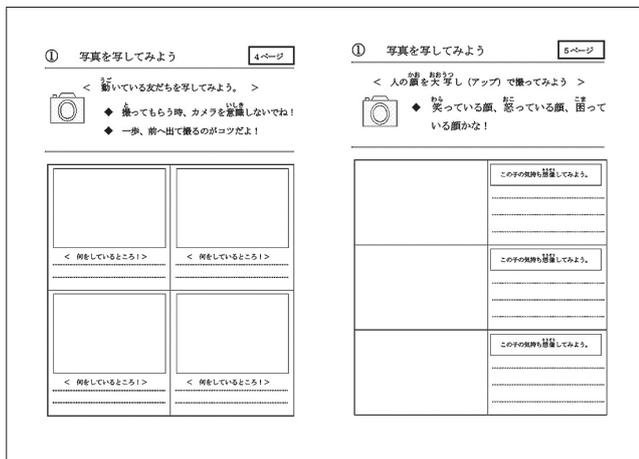
5 ワークブックの改定

児童全員のワークブックを分析した結果、4-1の活動では、「怒る」「驚く」「楽しい」「うれしい」等の顔の表情を捉えることは極めて難しく、初期の段階では動作を対象とする方が効果的と思われる。4-2の活動では、撮影者自身が驚く程、意外性のある作品を制作することができた。4-3の活動では、距離感をつかむことが極めて難しいことが明らかになった^[6]。

これらのことを踏まえ、能力目標の位置づけを一部変更し、ワークブックを以下のように全面的に改定した。

A <記録>

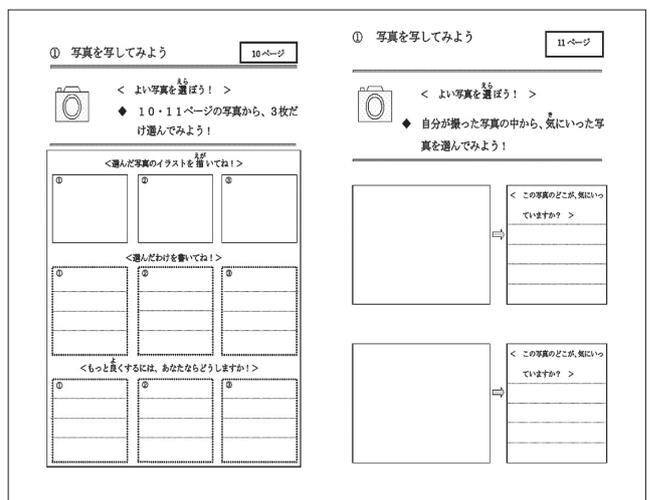
感情は顔に最も表出されることから、<人の顔を大写しで撮ってみよう>が瞬間を切り取る「記録」の最も基本と



なる。但し、状況設定の演出が難しい中学年においては、いろいろな動きを撮ることを課題とすることも効果的である。さらに、説明的な記録においては、「アップ」「近景」「遠景」の情報が必要であることに気付かせることが大切である。そのためには、事例を通して、「アップ」のみの写真と「遠景」のみの写真から読み取れる情報の質の違いに気付かせる事前指導が必要である。

B <造形>

意外性に気付かせるために、多様な視点で捉えた写真を



② こんな撮り方もあるよ 13ページ

② こんな撮り方もあるよ 13ページ

② こんな撮り方もあるよ 13ページ

② こんな撮り方もあるよ 13ページ

② こんな撮り方もあるよ 16ページ

② こんな撮り方もあるよ 17-1 ページ

② こんな撮り方もあるよ 16ページ

② こんな撮り方もあるよ 17-1 ページ

② こんな撮り方もあるよ 14-1 ページ

② こんな撮り方もあるよ 14-2 ページ

② こんな撮り方もあるよ 14-1 ページ

② こんな撮り方もあるよ 14-2 ページ

② こんな撮り方もあるよ 17-3 ページ

② こんな撮り方もあるよ 17-3 ページ

② こんな撮り方もあるよ 17-3 ページ

② こんな撮り方もあるよ 17-3 ページ

② こんな撮り方もあるよ 15-1 ページ

② こんな撮り方もあるよ 15-2 ページ

② こんな撮り方もあるよ 15-1 ページ

② こんな撮り方もあるよ 15-2 ページ

が、「転」のあるストーリーを構成することや「転」にあたる写真を選択することは極めて難しい。中学年では、ストーリーの面白さや明快さを重視したい。

＜参考文献＞

1. OKABE (2007) The practice of media literacy education based on the sign dimension of media and the sophistication dimension of literacy. International Conference for Media in Education. Busan,Corea1,pp59-66
2. 岡部 (1977)「映像教育カリキュラムに関する実証研究 (2)」, 『教育メディア研究』, Vol.4-1,pp1-12, 日本教育メディア学会
3. 岡部 (2005)「映像教育と情報教育とメディアリテラシー教育の位相」, 第12回日本教育メディア学会年次大会発表論文集, pp148-149, 日本教育メディア学会
4. 岡部 (2007)「初等教育におけるメディアリテラシーの育成」, 第14回日本教育メディア学会大会講演論文集, 日本教育メディア学会, pp118-119, 日本教育メディア学会
5. 岡部 (2008)「メディアリテラシー育成トレーニングパッケージ (プロトタイプ) の開発」, PP108-117 :「初等教育におけるメディア・リテラシー教育用リソース及びリソースガイドの開発」(科学研究費補助金研究成果報告書; 研究代表者, 三宅正太郎,課題番号 (18300297)
6. 岡部・吉田 (2008) フォトリテラシーを育成するパッケージの開発と授業実践, 第15回日本教育メディア学会大会講演論文集, PP28-29, 日本教育メディア学会

鑑賞させ、そこから気づいたこと・感じたことを意識化させることが大切である。その上で、近づく・遠のく・広角・望遠を使い分け、意外性から得られた体感・気づきを再確認させる必要がある。

C ＜伝達＞

テーマを設定してから撮影することが基本である。ある程度の枚数が撮れた段階でフォトストーリーを構成させる。

大筋が決定したら、その中からシンボリックな写真を選択させる。「起・承・転・結」で構成させるのが基本である